異世界生活を満喫します。チートスキル【マイホーム】で追放されたので、 「デブは出て行け!」と



突然、目の前が眩く光り、私は意識を失った。

そして次に目を覚ますと……そこは見知らぬ場所だった。

くつも備えられていることもあってか、暗いとか狭いって印象はない。ただ、遠巻きに私を取り囲 むように、 の奥の方から手前まで、大きな柱が何本も並んでいた。だけど、二階部分に光を取り込む窓がい 映画なんかで見る中世のお城に近いかもしれない。奥の方に、 鎧を着た人やなんだか豪勢な格好をしている人達がいて、 王様が座る椅子、玉座がある。 ちょっと怖い。 何ですか、

「おお! 召喚に成功したぞ!」

れは?

しょうかん? ゲームなんかで竜とかを呼び出す召喚のこと?

でも、竜やそれに近い生き物はいないし……みんな、 私を見てる。 召喚されたのって、 もしかし

て私?

.....違う。 右隣には日本の学生服を着た茶髪の男子がポカンとした表情で座り込んでいた。 私だけじゃない。 両隣に、 というにはちょっと遠いけど、 誰かいる。 そのまま左手に

「つ!」

視線を移す。

そこにいる人を見た瞬間、 私の心臓が飛び跳ねた。 身体が恐怖に震える。

6

城姫乃ちゃん、私の知っている人だった。 金色に染めた長い髪に、私が通っていた高校の学生服を着た、 吊り目の女性……姫ちゃんだ。

「あれ?あんた里奈じゃん」

里奈……江藤里奈。それが私の名前。

さっと目を逸らした私の顔は、 彼女もこの状況に混乱してるみたいだったけど、私 青ざめているだろうって自分でも分かる。 の顔を見てニヤリと笑う。 反対に、

「ぷっ……ぎゃはははは! 豚じゃん、豚!」 あんた、メチャクチャデブになってんじゃん! 相変わらず眼鏡だけ

姫ちゃんは私を指さし、腹を抱えて笑い出す。

学校のジャージ姿。これがまた恥ずかしさを倍増させていた。 いつもこんな格好だけど。 日々を過ごしていた。そのせいで以前は痩せていたのだけど、 になったのがそもそもの原因ではあるのだけれど……家から出られなくなった私は、 そう、私は彼女の言う通り、ブクブクに太っているのだ。この姫ちゃんに苛められて引きこもり 今は体重が九十キロもある。 なんでこんな格好の時に……って、 暴飲暴食の

私は悔しさと恥ずかしさを抱きながら、 俯いたまま姫ちゃ んの笑い 、声を聞 V 7 11

かしい……どんな罰ゲー 私達の様子を見て、 周囲にいる人達もクスクスと笑い出す。 ムでこんな場所に? もうこれまで充分地獄を味わってきたんだから勘弁 皆私のことを笑っているのだ。

してほしい。俯いたまま、早く終われと周囲の様子を窺う。

そうな人に声をかけた。 隣にいる男子もニヤニヤと笑っていたけれど、 ひと段落ついたところで、 目の前にいる一番高貴

「それより、なんだよここは?」

世界じゃな」 「おお、すまない。ここはメロディア。 私はメロディアの国王じゃ。 ここはお前達から見れ

うでそのまま聞いてくれた。 この人が王様だったんだ。 でも、 それよりもっと気になることがある。 彼もそこが気になったよ

「別の世界?」

「ああ。この世界にはお前達の世界とは違い、 モンスター と呼ばれる存在がおる

「モンスターって……ゲームの世界かよ!」

「ゲームというのはよく分からんが……モンスター、 そやつらがいるだけでこの世界の土地が痩せ、 自然が失われていくのだ。モンスターというの という概念自体は通じるのじゃ な? とにか

は自然の中にあるマナという物を吸い取って生きておるのでな」 「それで、 姫らがここに呼び出された理由は何? つまんない話だったら、 姫 怒るかん

然こんな場所に呼び出されて、 姫ちゃんは髪を指先でクルクルしながら王様にそう言った。視線は合わさず、 彼女だって戸惑っているし、 怯えているだけの私と違って、 髪を見ながら。 怒って

そんな様子に、王様はあたふたし始める。

8

「お、お前達には頼みがあって召喚をさせてもらったのだ」

かるようにさ」 「あのさ、 まずその召喚ってなんなわけ? まずはそこから説明してくんない? このデブにも分

たいだ。私はまた俯いて、 視線で私を示そうとして、 胃痛を感じ始めながら王様の話に耳を傾ける。 また噴き出す姫ちゃん。 皆も笑いそうになってなんとか堪えているみ

「召喚とは、 別の世界から人を呼び出す術の事じゃ……そしてお前達を召喚したのは他でもない

そのモンスター達の支配者、魔族王を倒してほしいからじゃ」

「魔族王?いや、そんなの倒す力なんてねえし」

茶髪の男子は鼻で笑いながらそう言った。

なんて物騒な人を倒すことなんてできやしない。 そりゃそうだ。私も姫ちゃんも、 そしておそらくこの人も普通の人間。 そんな私達に、 魔族王だ

んなのでモンスターに勝てるとも思えないけど。 召喚するなら、 もっと強い生物を呼んだ方が良かったんじゃない ? ライオンとかゾウとか。 そ

「いや、召喚された者は召喚された時、 規格外のスキルを与えられると言われておる」

「スキル? なんだそりゃ?」

「人それぞれに与えられた才能のようなものだ。 それ を調べ 、るには

王様はスッと懐から大きな球を取り出した。占い師が使ってそうな大きな宝玉だ。

「これに触れれば、お前達のスキルを調べることができる」

「ふーん……」

茶髪の男子は少し愉しそうに、 その宝玉に手で触れる。 すると宝玉が光り、 表面に文字が浮かび

上がってきた。

「……【勇者】だとよ」

ているか!」 「(勇者) これは間違いなく私達が望んでいたスキルの持ち主! やはり規格外 れの力を有し

周囲に歓声が響き渡る。 それを見た姫ちゃんはニヤッと笑って、 男子を押しのけ宝玉に触れる。

「姫はどうなのよ?」

またパッと光る宝玉。浮かび上がった文字を見て、 姫ちゃ んが口を開く。

「【大魔導】って……どうなの?」

【大魔導】 それも凄まじいスキルに違いな V この二人がいるだけで、 世界は救わ れる

「ま、流石姫って感じ? やっぱヤバいよね~

まぁこれだけ人から賞賛されて、 分のことを褒めさせていた。誰もかれもが彼女を褒め称えるこの状況は、 んはその名のとおり、 周囲からお姫様扱いされるの 嬉しくない人はいないか が大好きで、 学校でもいつも誰 とても嬉しいに違いな いに自 11

坚奈。次はあんたがやりなさいよ」

かった。私を蔑む顔、学校でよく見た顔だ。彼女にイジメられていた時の記憶が蘇る。 そう言う姫ちゃんの顔は笑みを浮かべたままだけれど、笑顔の種類はさっきと別だとはっきりわ

その顔を向けられると、今でも逆らうことができなくて……無言で頷き、 ひんやりとした宝玉に

二人の時と同じように光を放つ宝玉。文字も同じように浮かび上がった。

·····でも……これは……

「で、あんたのスキルはなんだったの?」

「……マ、【マイホーム】……」

「【マイホーム】って、家? 何それ! マジ面白いんだけど!!」

大爆笑する姫ちゃん。これには王様達も大声で笑い、見下すような視線を私に向ける。どうやら

大外れのスキルのようで、恥ずかしくて顔が上げられない。

しばらくして、ようやく笑うのを止めた王様達は、会話の続きを始めた。

「まぁ、二人のスキルがあれば問題ないであろう。 すまんが、世界を救ってくれまいか?」

「ええ〜どうしよっかな〜」

髪を指でいじる姫ちゃん。まんざらでもないような顔をしている。

「俺は別にいいぜ。モンスターと戦う勇者って、 面白そうだしな。 あ、 俺は下

「姫は結城姫乃。 気軽に姫って呼んでくれていいわ。 仕方ないから、 姫も世界を救ってあげる」

「カツヤにヒメか。いい名だ」

わ、私は……」

お前の名前はいいから。 外れスキルの豚になんて用はねえよ」

下柳くんがそう言い放つと、また大爆笑が湧き起こる。 私は泣き出しそうなのを我慢して、

る声で王様に訴えた。

わ、私は帰ります。だから今すぐに帰してください……」

「ああ、すまん。召喚は一方通行でな。私の力で帰してやることはできんのだ」

「ええ……? じゃあ私はこれからどうすれば……?」

「この二人に付いて行って、世界を救って来い。人間が所持している召喚とは逆に、 魔族王は他の

ならない。 世界に転移する術を所持していると聞く。戻るには魔族王からその術を奪い、 帰りたかったら二人の役に立ち、その術を手に入れるのだな」 我が物にしなければ

王様は完全に私のことを見下しているようだった。

王様の目の前で私をこれだけバカにする二人……姫ちゃんに至っては、私をイジメていた人なの

に、そんな二人について世界を救ってこい? そんなの……絶対に無理だよ。

「ってかさぁ。里奈みたいな眼鏡デブに付いてこられるの、 前みたいに姫の玩具でいいんだったら傍に置いておいてあげてもいいけどねぇ」 こっちから願い下げなんですけど。

ゾクリと背筋が冷える。学校でのことを思い出す。

暴力を振るわれ、

羞恥に満ちた地獄の日々。

嫌だ。姫ちゃんと一緒にいるだなんて、絶対に嫌だ!

「い、嫌だ……私、嫌だよ」

叫ぼうと思ったけど、震える声で絞り出すのが精いっぱいだった。

「だったらデブは出て行け! お前なんてこっちから願い下げよ!」

「そうだそうだ! 眼鏡豚はさっさと出て行け!」

L

私を侮辱する姫ちゃんと下柳くん。王様達も二人の後ろで笑っているようだった。

私はいたたまれず、悲しみと恥ずかしさに耐えながらその場を逃げ出した。

外がどうなっているのか分からない。これからどうすればいいのか分からない。

その思いのままに城を飛び出したら、大きな町が広がっていた。ぜえぜえ息を吐きながら、周り だけど、どんな状況だろうと、 姫ちゃん達と一緒に行動するぐらいなら一人の方がマシだ。

だけど、武器を持っている人や商人のような人、 の人達を見渡す。 海外の人みたいな見た目の人ばかりだ。それだけなら日本以外の国かなって感じ ゲームでしか見たことのないような人達が当たり

前のように歩いている。

本当に、異世界に来たんだ。

何をすればいいのか、 人と話をするのが苦手になっているから、 これからどうしよう……どこに何があるのかさえ分からない。 どうすればいいのか分からない。 人が通りかかっても何も聞けない。 それに、引きこもっ まるで迷子の子供だ。 7

本当に子供だったら、ここで泣いてれば誰かが助けてくれるんだろうけど。

::::::

私は子供じゃないし、 泣いたって誰も助けてくれないのに、 涙が溢れてくる。

なんて無責任な王様。なんて意地悪な同級生。なんて辛い現実。

私一人で生きていけるはずがない。八方塞がりだ。 私は……これからこんな世界で、 一人で生きていかなければいけないんだ。 いや、 こんなところ

を横切った親子の会話が耳に入った。 せめて他の誰かの迷惑にはならないように、と道の脇に寄って涙が止まるのを待っていると、

「いいかい、東にある崖には近づいちゃダメだよ。いいね

「はーい」

お母さんが自分の子供に言い聞かせている。

東にある崖……一体そこに何があるのだろう。不思議とそれが気になって、東を目指すことに

した。

まった。だって、こんな場所で一人で生きていく自信もない 危険な場所なんだろうけど、もし死んでしまったとしても、それはそれで構わないとすら思っ どうせやるべきこともやりたいこともない。 何気ない会話の中でも子供に言い聞かせるぐらい てし

ため息をついて、町から出る。

町の外は草原だった。 緑がどこまでも広がっていて、 気持ちのい (V) 風が吹いてい る。

でも、ちょっぴり心が癒されるようだった。

「えーっと……東ってこっちだよね?」

らでいいや。 こっちが東だと思うんだけど……悩んでいても仕方ない。 ハッキリとした方角は分からないが、さっきのお母さんがこちらの方を指さしていた。だから とにかく歩いて行こう。 違ったら違った

王様が言っていたモンスターらしき姿が見えたのだ。緑色の肌に子供のような身体。 のようだ。 そう思って歩き出したところで、 前の世界のゲームに出てきたゴブリンに近いかな、こっちでもゴブリンって言うんだろ 早々に足を止めなくちゃいけない事態に遭遇した。 顔はまるで鬼 遠く 、の方に

そん 倒しやすい敵であることが多いけど、今の私が見つかったら間違いなく殺される。 なことを考えて恐怖心を紛らわせなが 5 コソ コソ隠れるようにして歩く。 ムでは序

うものだ。追い出されなくても、 なくとも戦闘では全くの役立たずに違いない。そりゃ姫ちゃん達に追い出されるのも仕方ないとい だって私のスキルは 【マイホーム】なんだから。どんなスキルなのかよく分かってないけど、 姫ちゃんとは一緒にいたくないけれど。

ありがたいことに緑色のモンスターに見つかることなく、私は道を進むことができた。 しかし東って……どこまで行けばいいの?

後のようだ。 歩き出して数分、 引きこもりに運動はキツい。 すでに私は息を切らしていた。マラソン選手が大会に出場して完走しきった直 それに体型が体型だからな……自分のお腹をつまんで、

うっすらと自嘲の笑みを浮かべる。

引き返そうかな、なんて考えがちらっとよぎるけれど、 他に当てもない。 戻ったところで惨めな思いをするだけだ。 引き返したところで誰も私を助けてくれ

私は諦めのような気持ちで、トボトボと道を歩くしかなかった。

「い、いったいどこまで歩けばいいのぉ……?」

崖なんて目指すんじゃなかった。子供に注意するくらいだから、 と思ってた。 数時間後、崖の近くっぽい地形にはなったけれど、崖そのものはまだ現れない。こんなことなら 小さい子でも簡単に行ける距離だ

もので、私はひたすら足を引きずっていた。でももう無理、もう死にたい、誰か殺して。 別に強制されたわけじゃないから嫌なら止まればいいのに、ここまでくると一種の意地み たい な

されるだろう。 少し離れたところに緑色のモンスターがいる。 あのモンスターの前に出れば私なんてさくっと殺

:' :: ::

足を引きずり、 やっぱり殺されるの さらに東を目指す。ようやく、 は勘弁。 死んでもいいと考えていても、 崖らしきものが見えて来た。 殺されるのは嫌だ。

「菫だ……!」

妙な達成感を覚え、 私はドバドバ涙と汗を流しながら、 最後の力を振り絞って崖まで走った。

確かにこれは近づい達ゃダメだ、と肌で感じる。 そのまま崖の下を見下ろす。黒い霧がかかっていて底が見えない。 禍々しい雰囲気だ。 なるほど、

しばらく立ち止まって眺めていたら、達成感と替わるように徒労感が押し寄せて来た

「こんなところまで来ておいて、危険を確認して終わり?」

んなところが気になって、ここまで来ちゃったんだろう? 無意識に言葉を漏らす。 何時間も歩いて来て、結果がこれでは救われない。 そもそも、 なんでこ

から私の人生、こんなになっちゃったんだろ。涙がこぼれる。さっきから泣いてばっかりだ。 一度疑問が浮かぶと、全て悪い方に考え始めてしまう。なんか、 全然いいことがないなぁ。 V つ

この崖から落ちて、 人生を終わらせてみるのも悪くないかも。

ح の世界に来てからちらついていた『死』という未来が、 さっきより具体的な選択肢として頭に

「……いやいや、 やっぱり死ぬわけにはいかないや。 折角お父さんとお母さんにもらった命な

しかし、その瞬間、 こんなところにいるから馬鹿なことを考えてしまうのだと、踵を返しこの場を立ち去ろうとした。 ああ、これは死んじゃうな。 私の足元の地面が崩れ落ちた 崖の一部が崩れて、 落下してしまったのだ。

走馬灯の代わりにそんな諦めを抱きながら、 私は黒い谷底へと吸い込まれていった。

* *

谷底、黒荒地と呼ばれるその場所には、黒いドラゴンがいた。

い爪。尻尾は大木のように太く長い。右前足には龍の鱗で作られた二対の腕輪がある。 夜の如く黒い鱗に鮮血のような紅い瞳。生きとし生ける者全てが畏怖の念を抱くほどの巨体に鋭

そんなドラゴンは今、黒い霧がかかった荒地で、 一人身体を丸めていた。

した。 彼は孤独なのだ。これまでずっと独りで生きてきた。孤独は彼の心を氷のように冷たく、

ずっと独りだったドラゴンは強くなり続け、いつしか邪龍などと呼ばれるようになっていた。 独りでも生きていけるように。 独りでも誰にも負けないように。 独りでも涙を流さないように。

邪龍ヴォイドドラゴン――それが今の彼の名前だった。

ヴォイドドラゴンは、まどろみながら思考する。

何もいらない…… 邪魔なだけだ。 これまでも、そしてこれからも独りで生きていく。自分以外の他の誰かなんて必要じゃない。 自分は全ての生物から忌避される運命にある。 だから何もいらない。 強さ以外は

めてその正体を視認する。 な彼の頭上から、 何かが降ってくるのが見えた。 霧のかかった空を見上げ、 禍々しい瞳を細

は人間であった。 この世界では珍しく眼鏡をかけ、 平均よりも酷く肥えた人間だ

崖から転落したのか……

死ぬ前に食らって一時の腹の足しにするか、普段であればその程度の選択しかなかった。 ヴォイドドラゴンは空から落ちるその人間を見上げた。そのままそ墜落死するまで捨て置くか、

-だから、 この時の彼の行動を、 彼自身でさえ当時は理解できなかった。

の子を助けるんだと心が叫び、何か考えるより先に翼を広げた。

にあったのだ。その運命がヴォイドドラゴンの背中を押す。 それはきっと運命だったのだろう。空から落ちる人間 里奈とヴォイドドラゴンは出逢う運命

うに柔らかく優しく、 ヴォイドドラゴンは里奈の落下地点へと急いだ。 背中に彼女の体を乗せる。 そして衝撃を与えないよう、 赤ん坊に触れるよ

霧は人間が『瘴気』と呼ぶもので、 でしまうと彼は知っていた。 怪我はない。だが意識もない。 このまま放っておけば、 人間が瘴気のある場所に何の対処もなく入り込めばすぐに死ん 彼女は死んでしまうであろう。 の黒 V

この人間を死なせないですむ方法は二つある。

一つは自分が空気の新鮮な場所まで運んでやること。

邪龍の血となれば、こんな瘴気ぐらい問題ないぐらいには身体が強くなるはずだ。 そしてもう一つは、 自分の血を分け与えること。龍の血を飲んだ者には力が与えられる。

それらを当たり前のように検討している自分に気づいて、 ヴォイドドラゴンは自分自身を嘲笑う。

「……人間に自分の血を分け与えるのか? 馬鹿馬鹿しい」

り向く。 で眠りにつこうとした。 自分の背中から里奈を下ろし、 しかし、 彼女を地面に寝そべらせる。 背後で横たわる里奈のことがどうしても気になり、 そのまま里奈に背中を向け、 彼女の方を振 その場

「人間なんて、どうでもいいっていうのに……なんでこいつに限って……」

だがそこでヴォイドドラゴンは気づく。

彼女は――俺だと。

誰にも助けられず、 こんな黒い世界で孤独に死んでいこうとしているその姿は、 強くなることが

出来なかった場合に自分に待ち受けていた末路そのものじゃないか

『優しくしてもらいたいなら、優しくしなさい』

いつかどこかで誰かが言っていたことを思い出す。

ぎるたびに思っていた。 周りを気に掛けることなく孤独に生きてきたから、 今までは、優しくしたぐらいで優しくなんてしてもらえるはずがないと、 その言葉は心に突き刺さったままだ。 いつもは忘れているのに、ふとした時にこうして思い出 誰が言 ったのかは思い出せない。 その言葉が脳裏をよ だけど何故

「……だけど」

もしも、その言葉が本当だったら?

イドドラゴンは自分の指先を爪で傷つけた。 数滴滴る赤い ・血を、 里奈の口元に垂らす。 里奈

は意識のないまま、それをゴクリと飲み込む。熱にうなされるようだった表情が、

そうしていると、 ゆっくりと里奈の目が開く。 向かっていく。ヴォイドドラゴンはその様子を無言で見下ろしていた。

里奈は目を開き、自分の目の前に立つヴォイドドラゴンの姿に顔面蒼白となった。

⁻え……えええつ!!」

悲鳴に近い声をあげて、 また同じか……誰もがそうだ。自分のことを怖がるんだ。誰もが、 両腕で自分自身を抱きしめるようにして、 ガタガタ震え始める。 俺を忌み嫌うんだ。

そう考え、ズキンと心に痛みを覚えるヴォイドドラゴン。

里奈は違った。腕に触れたことで傷がないことに気づいたのだろう、 はっとした顔をし

た後に、ヴォイドドラゴンの顔と翼を見て、その身体の震えを止めたのだ。

「あの……もしかして、貴方が助けてくれたんですか?」

「……ありがとうございます。おかげさまで死なずにすみました」

里奈の真っ直ぐな笑顔。それはヴォイドドラゴンが初めて見る、優しい光景であった。

のであった。 黒い大地で、 白く輝くその笑顔に、ヴォイドドラゴンは照れ臭くなり、里奈から赤い瞳を逸らす



崖から落ちる途中で、私は気を失っていたようだ。

ど……少しだけ寂しそうな目をしている。 そして目を覚ますと、 目の前には大きく恐ろしい真っ黒なドラゴンがいた。 とても怖い。 だけ

Ţ.....

いや、 このドラゴンが助けてくれたんだと判断してお礼を言ったけど、 そもそも人間の言葉を理解できなくても不思議はない。 そっぽを向くだけで反応はな

い

いの理由だったんだろう。 多分、私を助けてくれたのは、気まぐれとか、自分の住処に死体が増えたら嫌だとか、 私は肩を落とし、この場を去ることにした。

て歩き出した。 それでも助けてくれたことに感謝し、私は大きく龍に向かって頭を下げる。 助けてくれた時に何かしてくれたのか、 体が軽い。 そして私は踵を返し

「……おい」

「うえっ!!」

ズレ落ちそうになる眼鏡。私はアワアワと眼鏡を押さえて振り返る。

なんと竜が、人間の言葉を喋ったのだ。

いや、もしかしたらこの世界では常識なのかもしれない。 さっき遠目に見たモンスターも人間の

言葉を話すのかもしれないな。

「な、なんでしょう?」

「……お前は、俺が怖くないのか?」

「怖くない……と言ったら嘘になるけど、 でも龍さんは優しいですから」

何も言わずに私を見下ろす龍さん。 私もまた、無言で龍さんを見上げていた。

意外となんとか会話できているな。 姫ちゃ ん達とはまともに喋れなかったのに。

-……お前、俺が人間の姿の方が話しやすいか?」

「え? はぁ……見上げているのも首が疲れますからね

「そうか」

それだけ言うと、 龍さんの身体が真っ黒な霧のような物に包まれる。 周囲を漂う霧なんかよりも

さらに黒い色だ。

そして霧が晴れると -そこにあった龍さんの姿がなくなっていた。

「あれ? どこに行ったんだろ……」

「おい、こっちだ」

龍さんの声だ。だけどさっきまでより小さくなったような……?

声の方に目を向ける。 見上げていた視線をぐっと下げると、 そこにはなんと、 黒髪の美青年が

23

いた!

「うわぁ……」

無駄という概念を感じ取れない。右手には、龍の姿の時にもあった腕輪が二つある。海外俳優みた いにカッコイイ姿のその人は、何故か私を睨んでいるけど、悪意は含まれていない気がする。 サラサラの黒髪に炎のような赤い瞳。 背は高く、 体は細身だが筋肉質のようで、彼の肉体からは

24

この人……もしかして龍さん?

「え? 龍さんですか?」

「だったらなんだってんだよ? 悪いか?

「い、いえ……悪くありません」

私にとっては何も悪くないけど、彼は機嫌が悪そう? 私がいるだけで、 イラつかせているのか

な……? 私は視線を落とし、深くため息をつく。

「お、おい。なんで落ち込んでんだよ?」

「だって龍さん、怒ってるじゃないですか」

「怒ってる? そんなつもりはねえ、俺は怒っちゃいねえよ!」

ほんのり顔を赤くして龍さんは怒鳴った。

怒ってないなら、もっと静かに言ってくれればいいのに

後、お前。敬語は使わなくていい。普通に喋れ」

「あ、はい……じゃなかった、うん」

....

「あの、ありがとね、龍さん。私のことを助けてくれて」

別に……どうってことねえよ。 大したことはやってねえんだから。 あと、 龍さんは止めろ」

「でも、名前知らないし……」

龍さんは嘆息し、腕を組んで口を開いた。

「俺はヴォイドドラゴンだ」

なんだ?」

率直な感想を言っていいのかな。 いいよね、 お世辞を言ったり誤魔化したりした方が怒りそう。

いや、長いなって」

「長くて悪かったな! じゃあ、 お前の名前はなんて言うんだよ!」

私は江藤里奈」

ヴォイドドラゴンさん……いや、 ヴォイドドラゴン、 でいいや……は私の名前を聞いて鼻で笑っ

た。え? そんなにおかしい名前かな?

「なんだよ、お前だって名前長いじゃねえか!」

「ヴォイドドラゴンより短いと思うけどな……それに私の名前は里奈だし。 江藤は苗字だよ_

「み、苗字……? なんだそれ?」

ないだけなのかな? ああ、苗字を知らないんだ。この世界には苗字が無いのかな? それとも、 この人が苗字を知ら

んー。家族の名前? みたいな感じかな」

- 家族σ名前……?」

「うん。一緒の家で暮らしている人同士が名乗るもう一つの名前だよ」

「そうなのか……お前――リナ」

ほんのり頬を紅潮させるヴォイドドラゴン。

?

リナは、どこに住んでんだ? どうしてここに落ちて来た?」

ここに落ちて来た理由。 落ちるまでにあったこと。 それを思い出した瞬間、 ポ ロリ と涙が ?零れ

「お、おい! なんで泣いてるんだよ! 俺、何か言ったか?」

「ううん……ヴォイドドラゴンは何も悪い事言ってないよ」

「だったら泣くんじゃねえよ!おい、泣くなって」

て、私にとって、久々の他人の優しさだった。 と私の頭に手を伸ばしてくる。そのままポンポンと私の頭を撫でてくれた。その手はとても暖かく ヴォイドドラゴンは、泣いている私の視界でも理解できるほど分かりやすく慌てた後、 おずおず

わにし、天を睨み付ける。 オドオドする彼に、私はこれまでのことをポツリポツリと説明した。 そう思ったら、 今度は寂しさに満ちた顔で私を見た すると彼は激しい怒りを露

「……お前も俺と一緒なんだな」

「ああ。皆からのけ者にされて、 虐げられて……辛い者同士だな」

かじゃないかな? ヴォイドドラゴンも、好きで此処に一人でいるわけじゃなくて、のけ者にされて此処にいる……? もしかして『ヴォイドドラゴン』って名前、この人の名前じゃなくて種族名か何

はなんとなく寂しい。長いなら短くしたらいいって理由もある。 私は涙を拭き、 彼の名前について思案した。 本人は気にしてないみたいだけど、 種族名で呼ぶの

「似た者同士だね、私達。ね、イド」

「……イド?」

「うん。私が呼ぶあなたの名前。愛称とかニックネームって言ってね、 短くして呼ぶことがあるんだよ」 仲良くしたい人の名前が長

ど……ううん、姫ちゃんのことは今は考えない! 姫ちゃんみたいに、もう絶対に仲良くなれないってなっても昔の癖が残っちゃうこともあるけ

なのに……なんだかふとした仕草が可愛いな、イドって。 私が笑顔でそう言うと、イドは首を傾げながらも、頬を赤く染めているようだった。 怖い見た目

あるのか分からないし、なんだか変な匂いもするしでこんなところにいたら体調が悪くなりそう。 「ねえ、別の場所に行かない? 私は一度クスリと笑い、 それから周囲を見渡す。 ちょっと空気が悪すぎるからさ……」 ここは空気が悪い。 黒い霧の所為でどこに何が

「お前は大丈夫だ」

「大丈夫って……なんで?」

「俺の血を分けてやったんだ。もうこの程度の空気ぐらいどうってことねえよ」

ぞ ふーん……?」

よく分かんないけど大丈夫なんだ。 ここにずっといたっぽい イドがそう言うなら大丈夫なんだ

よね。

「分かった。じゃあ気にしないようにするよ」

でもこの匂いだけはどうにかならないものかな……腐ったような匂 vi がしてちょっとキツ 15

「……あ」

私はそこで、自分にスキルというものがあるのを思い出した。

いもやり過ごせるんじゃないだろうか。 【マイホーム】。 それが本当にあるとしたら……まぁ普通に考えて家だよね。 しかしどうやって使えばいいんだろ。 もしかしたらイドが 家の 中 の句

何か知ってるかもしれないな。よし、聞いてみよう。

「ねえイド。スキルってどうやって使えばいいのかな?」

「スキルだぁ? そんなの、こう、バンッ、って使えばい いだろうが

イドは右手を前に突き出してそんなことを言う。

私は彼と同じように右手を突き出し、 試してみる。

バ、 バアン!」

何も発動しない。何も起こらない

やっぱり【マイホーム】なんてスキルないんじゃない 。 の ?

項垂れて苦笑いを浮かべる私に、イドが少し慌てた様子で言ってくる。

落ち込むんじゃねえよ! 俺の教え方が悪かった……お前は悪くねえからな!」

怒鳴るような口調で優しいことを言ってくれるイド。

イドの優しさに胸がキュンとする。こんな風に私を気にしてくれる人がいるんだ。 まぁどちらにしても、私のことを気にしてくれてるんだな。 。嬉しい。 あ、 人ではな

「まず、お前のスキルはなんだ?」

「【マイホーム】……」

「なんだそりゃ? 聞いたことねえな……じゃあとりあえず、 そのスキル名を唱えてみろよ。 それ

でだいたい発動すること多いし」

「そうなの?」

「多分だけどな。 人間のスキル に関してはそこまで知ってるわけじゃねえが、 戦ったことがある奴

はスキル名を叫んでたような気がする

「そっか……よーし」

私は深呼吸し、 右手を突き出 そして大声で叫ぶ

7

すると突き出した右手の先に、 ボンッと大きな一軒家が出現した。

まるで魔法だ。 おとぎ話に出てくるような、 不思議な力。

「「おおっ……」」

私とイドは感嘆の声を上げ、 出現した家を見上げていた。

呼ばれる物がついている。幾つもの窓が備え付けられており、屋根は瓦でできているようだ。 それは白をベースにした鉄骨二階建てで、 玄関は元の世界でよくある細長いプッシュハンドルと

から見れば、 うん。この世界には似つかわしくない建物。どう考えても別世界の家にしか見えない。だけど私 見慣れた一軒家だ。

元の世界ではどこにでもあるような物で、この世界にはどこにもなさそうな物

ているのか……私の 玄関の扉を開くと土間があり、靴を脱いで入るスタイルになっている。 『家といったらこういうもの』ってイメージなんかが投影されてたりするのか 家は日本風の作 ij に 0

な? あまり難しく考えても仕方ないし、深く考えるのは止めておこう。

玄関の先には廊下が伸びており、右手に二階へと続く階段がある。

廊下の左手にドアが二つ。 正面にドアが一つ。 階段の下にドアが一 つある。

「ここで靴脱いで」

ああ……」

もちろん、 人間の姿になっていたイドも靴を履い ていた。 それを脱いでもらい、

と足を踏み入れる。

扉が閉じられたことにより、 嫌な臭いが遮断された。 ああ、 良かった。 ここなら匂いも気にせず

にすみそう。

設置されていて、 六畳ほどの部屋で、 一番の心配事が片付いたので、 外の景色を眺めることができる。 物は何も置いていない。 早速家の中を見て回ることにした。まずは左手手前の扉。 クローゼットがあり、 玄関に面した方向に窓ガラスが そこは

しかし外は霧かかっていて、とてもじゃないが景色がい いとは言い難い。 むしろ最低とい っても

次に奥の左手の扉。そこを開くと、 十二畳ほどの部屋。 こちらにも窓ガラスが設置されてい

「凄く広い……一人暮らしだったら持て余しちゃうよ」

広々とした空間に私はワクワクする。

「……これで広いのか?」

だって私が住んでた部屋は、 隣の部屋ぐらいだったんだよ。 それなのにここは倍ぐら

い広いんだから、 ずいぶん広いと思わない?」

まぁ、 倍になりゃ広いんじゃねえの?」

「だよね」

私が笑顔を向けると、 イドはプイと顔を逸らす。

一緒にいるのが嫌だったりする……? やっぱりイドも姫ちゃん達と同じで、このスキル外れスキルだなって思ってたり、そもそも私と い人のはずだから、 姫ちゃん達と一緒にしたらダメだ。 って、ダメダメ! イドはそんな人じゃないはず! イド

せりぶりに私は感動を覚える。 便所。タンクレストイレ。トイレの音消し付き! 気を取り直して、 続きを見ていくことにした。 階段下にある扉の中は……トイレだ。 これは言うことなしだよ。 あまりの至れり尽く それも水洗

感激したまま、次は正面のドアを開いた。

すると中には、 ぬいぐるみのような物が地面に立っており、 私を見るなりお辞儀をしてきた。

「お帰りなさい、リナ様」

-.....ど、どなたでしょうか?」

首に巻いている。 白い熊のぬいぐるみのような外見。 でも背中には天使の翼が生えており、 暖かそうなマフラー を

その子はパタパタとその翼を動かし、 私の 足元へと移動してきた。

まず言葉を喋ったことに驚き、 そして動いたことに二度驚く私。この子は……?

初めましてリナ様。 僕の名前は……まだ無いからつけてくれないかな?」

は、はあ……」

表情の変化は少ない が、 身体全体で意思を伝えるように動かしている。 見た目は可愛い い

子じゃなさそう。

「なんだてめえは?」

だがイドは怪訝そうな顔つきで、その子を足先でツンツンする。

「僕は 【マイホーム】のことをリナ様に説明するために生まれた存在。 まぁ簡単に言えばリナ様

·ポーターだね」

「サポーター……?」

まるで【マイホーム】ってスキルには家が手に入る他にも何かありそうな口ぶりだ。 もしもそう

なら、説明があったらずいぶん助かるな。

「じゃあ、熊のぬいぐるみっぽいから……クマ!」

「ありがとう、リナ様」

ペコリと頭を下げるクマ。 その姿がとても可愛らしくて、私はほっこりする。

イドはまだ警戒しているのか、 部屋に入って少し距離を取っていた。

この部屋はどうやらリビングのようで、 お金持ちの家のような広々とした空間になっ てい

麗で清潔そうなキッチンもある。

「早速だけど説明をするね。この

【マイホ

5

はリナ様の幸福度が高まること、そしてリナ様が

「ちょ、ちょっと待って……幸福度?」

善行を積む事によってレベルが上がるようになっているよ」

「うん。幸福度」

かな? 幸福度って……幸せを感じる度合 1 ってこと? それ にレ べ ル つ て 何 ? 能力が強くなるの

「現在の 【マイホ j L 0) レベルは ------どうやらずいぶん幸福度が低いんだね」

「あはは……まぁ引きこもってたし、 この世界に来て絶望してたしね」

そりゃ低くて当然。レベルが低いのも頷ける。

「レベルが上がったらどうなるのかな?」

「レベルが上がれば、この【マイホーム】でできることも増えていくよ

……ちょっと面白そうだね。ちなみに、今はどんなことができるの?」

て来る。……え? タブレット? するとクマはキッチンの方へとパタパタと飛んで行き、 銀色のタブレットを持ってこちらに戻 っ

かりやすいと思うよ」 「このタブレットは【マイホーム】と連動しているから、 何ができるのかはこれを確認した方が分

レットを確認してみる。 可愛らしい、声変わりする前の少年のような声でそう説明してくれるクマ。 私は手渡されたタブ

マイホーム レベル1

機能 空気清浄

「……空気清浄? これだけ?」

「それだけみたいだね」

と納得する。 空気清浄だけか……と一瞬落ち込むも、 外の黒い霧を遮断してるんだ。 中の空気がこんなに綺麗なのはこの機能のおかげなのか

「おい……そりゃなんだよ?」

「これはタブレットって言って……私が来た世界のオモチャみたいなものかな?」

きる『レベル』というものしか、 ないよね? 他にどんなアプリがインストールされているのか確認したら、 オモチャではないけど、 説明がややこしい。私は基本的にゲームに使ってたから、 画面には表示されていない 現在のレベルを確認で 間違っても

「まぁ、家があるだけマシか。野宿しなくてすみそうだし」

私が笑顔でそう言うと、イドは首を傾げて口を開く。

とってよくはねえんだろ?」 「なんでそんな笑ってんだよ。 人間の常識はよく分からねえが、 少なくとも今の状況は、 お前に

? 「んー……でも、 イドもクマもいるし、 独りじゃないもん。 独りじゃないってだけで幸せじゃ

キョトンとするイド。

配してるだろうな……そこだけは後悔だし未練ではある。だから、 人と話ができるのが嬉しい。あっそういえばお父さんとお母さん……いきなり私がいなくなって心 いたがそれだけ。 これまで私は引きこもりで友達もいなくて……本当に寂しい生活をしていた。 しくて、 でもそのうえで、 誰か話をする人がいるだけで幸せだったんだろうけど……こうやっ 私にとって最悪の状況ではない。 『よくはねえ』ってイドの言葉 家族と会話はして て家族以外の

彼が優しい心の持ち主だということを分かっているからだろう。 そういえば、 イドとはもう普通に話ができる。元々は人と会話をするのが好きだったし、 それに

「俺も……ここにいれば独りじゃねえってことか」

寂しくないよね」 「うん。イドがいるから私は独りじゃないし、私がいるからイドは独りじゃないよ。 二 人 一

「そ、そうか……」

覗き込んだ。 イドは驚いたような、 嬉しいような、 複雑な表情をしてい た。 私は少し不安になり、 イド σ 顔を

「私と一緒じゃ嫌?」

そりゃ私は眼鏡で太っていて可愛くないし……こんな女といても嬉しくはない

か

少し私が落ち込むと、イドは腕を組んで顔を逸らす。

 $\stackrel{\neg}{\sim}$? お、 お前がいて……嬉しくないことないんだからな!」

強いイドは可愛いよ。デレが強いから、これは表現するならツンデレデレだ。 これは……ツンデレ? しかし、 ツンの部分が少ないように思える。 可愛い……デレ要素の方が

知らなかった顔を知れたみたいで嬉しいなぁ。 イドの新たな一面に、 私は感動を覚えていた。 胸がポカポカしてほっこりする。 なんだか友達の

クマの目がピコーンと光る。

「リナ様」

「ん? どうしたの?」

「【マイホーム】のレベルが二になったよ」

「え……? レベルが上がったの?」

いきなりのことに唖然としつつも、 嬉しさに胸を踊らせタブレットを確認してみる。

egイホー -ムレベル

機能 空気清浄Ⅱ 身体能力強化Ⅰ ショップI

「おお……『身体能力強化』というのと『ショップ』というのが追加されてるよ!」

「なんだそりゃ?」

「これはね……なんなの、 クマ?」

イドが私に訊いてくるが、当然のように答えられない私。 クマは可愛らしい声で私達に説明して

ゆるネットショッピングが可能になる機能だね」 「『身体能力強化』はそのままの意味で、リナ様の身体能力が上昇するよ。 『ショップ』 はまぁ V ゎ

まさか異世界に来てネットショッピングができるだなんて、

ネットショッピングができるんだぁ。

凄い便利だね

嘘みたい。

タブレ

ッ

1

にも

『シ

Ξ

w

のアプリが追加されている。

他にはティッシュなど、 表示された。商品はというと、日常品などを購入できるみたいだ。歯ブラシや石鹸にシャンプー、 試しに『ショップ』のアプリを立ち上げてみると、世界的に有名なネットショップに似た画面が 生活必需品がごまんと並んでいる。

「これは便利だね。本当にありがたいよ」

「で、それはなんなんだ?」

「これを使うだけで買い物ができるんだよ」

? 買い物って……どうやって買うんだ? 意味が分かんねえ

知らない人にネットショッピングを説明するのは難しいな……なんて説明すればい 多分この世界にインターネットはないし、万一あったとしてもイドは絶対に知らな いんだろ。

らないけど、とにかく商品が届くの」 「んとね……人と会わなくてもこれで注文するだけで商品がここに届くんだよ。 難しいことは分か

「……やっぱ意味分かんねえよ」

頭をかくイド。 まぁ一度買っているところを見せた方が早いな

ということで、 私は早速ネットショッピングで買い物をすることにした。

「これとこれと……後はこれも必要だよね」

いをしたことがあるだろうか? タブレットを操作し、必要な物を買い物かごに入れ 私はウキウキしながらタブレットで注文をしていく。 ていく。 今までの人生でこれほどまでに爆買

「これで合計いくらだろ……って、 お金はどうするの?!」

ここで大事なことを思い出す。

そうだ……お金はどうすればいいんだ? 購入画面を確認してみると、 やはりお金は請求されて

いる。 そりゃタダってわけないよね。私は苦笑いし、クマの方を見る。

「買い物はこの世界の通貨でできるよ」

「この世界のお金か……イドはいくら持ってるの?」

だよ」 「俺 !? 持ってるわけねえだろ。俺はドラゴンだ。 人間 の通貨なんて興味もねえし必要ねえん

「そっか……そうだよね

私は腕を組んで頭を傾ける。

「うーん……お金はどうやって稼げばいいんだろ?」

「方法としてはいくつかあるよ。一つは純粋にこの世界で労働すること」

帰ったところで働かせ

てもらえないよ」 「うん。それはもっと不可能だよ。だって私戦えないし」 「うん。いきなりハードルが高すぎる。 モンスターを狩ってお金を稼ぐ方法があるね」 人のいる場所まで帰る方法ないし、

「俺がいるだろうが」

当たり前のように指摘してきたイドの方を見れば、 彼は照れくさそうに言う。

飯前だからな」 「お、お前が戦えないってのなら、俺が戦ってやる。 モンスター倒すぐらい、 俺から言わせりゃ朝

そうなんだ……でも、 イドにそんなことやってもらうのは悪い

「べ、別に悪くねえよ……」

「でも……」

申し訳なさに私がシュンとしていると、イドは声を荒げる

「お、お前のためにやってやるって言ってんだよ!」

「イド……」

リットもないのに助けてくれるなんて、底なしの善人だ、イドは。 イドの優しさにうっかり泣きそうになる。こんないい人、 今まで見たことない。 自分になんのメ

「ありがとう、イド」

勘違いするなよな! お礼を言われたいためにやるんじゃねえんだからな!」

それは分かっています。 本当に素晴らしい人だと分かっています。だから大感謝。

くて涙が出ちゃう。

「じゃあ私もイドのためにできることをするね

「あ、ああ?」

「だってそうでしょ? イドが私に優しくしてくれてるんだから、 私もイドの優しさにお返しがし

たい。でも……本当は理由なんて必要ないの。 私、 純粋にイドが喜ぶ顔が見たいんだ」

「つ……」

イドは不意に、 私から顔を逸らす。逸らしたかと思うと、肩を震わせていた。

「……イド?」

な、 なんでもねえよ! とにかく、 明日から俺がお前の代わりに狩りをやってやる! 1 N

「うん! 私もイドにしてあげられることはなんでもやってあげるね!」

「……おお」

イドは顔を逸らしたまま、ガラス戸から外を眺めていた。

ドが明日からって言っているから、夜なのだろう。もう遅い時間だから戦いにいけないというわ 外は既に真っ暗だ。黒い霧がかかっているからなのか、夜だからなのかは分からない。だけどイ

「じゃあこれからよろしくね、イド」

けだ。

「おお……よろしく」

私が手を差し伸べると、 彼は照れくさそうに私の手を握り返してくれる。

きっと明日からは、 姫ちゃんと再会した時は地獄にでも来た気分だったけど、今はなんだかワクワクが止まらない 楽しい生活が待っているはず。 イドの横顔を見て、 そんな確信が胸の中で咲き

41

始めていた。

「……あれ? ·····あれ? ·····あれぇ?:」

私はリビングで目を覚ました。少し離れたところで寝ているイドが私の驚く声で目を覚ます。

どしたんだよ?」

「かかか、

引きこもり生活のせいでぶくぶく太っていた私の身体が痩せているではないか。スタイルがかか、顔が……痩せてる……いや、顔だけじゃなくて体全部痩せちゃってる!」 それでも完全に痩せている。 11

寝て起きただけなのに……なんで?

「なんで痩せてるの……それに、目が見える」

いい。……なんて考えている場合じゃない。なんでこんなに目が見えるの? い程だ。なのに眼鏡なしで少し離れた距離にいるイドの表情が分かる。 これは引きこもりとは関係なく、 私は元々視力が低い。眼鏡が無かったら家のトイレにも あ、寝起きのイドもカッコ けな

「どうなってるのこれ? 異世界効果? 異世界にはそんな効果があるの?」

驚いてばかりの私に、イドがあくびをしながら答える。

「そりゃ俺の血を飲んだからだろうが」

血を飲んだ? そういえば昨日もそんなこと言ってたね、 私にそんな記憶ない

「お前は気を失ってたからな……瘴気で死ぬ寸前だったんだぜ。 だから俺の血を飲ませて助けたん

だよ。 龍の血を飲めば身体が強くなるからな」

「へ、ヘー……改めて、助けてくれて本当にありがとう、 イド」

私がペコリと頭を下げるとイドは分かりやすく照れていた。本当いい人だな、 イドは。

「とにかくだ! 龍の血を飲んだから身体がいい状態に保たれて、視力も回復したんだろうな」

「そっか……そうだったんだ」

ないからそんな計画は絶対遂行しないけど。 も稼げそうだよね。世界中の人達が言い値で買ってくれそうな予感。 イドの血は凄いんだ。こんなに痩せられるなら、 ダイエ ッ ト効果の イドに血を出させなきゃいけ ある薬として売り出 せばお金

「イド、痛くなかった?」血を出してくれたんだよね

「痛くなんかねえよ。そんなくだらねえこと気にしてんじゃねえ

「……うん。ありがとう」

たけど、耳が真っ赤になっている。やっぱり分かりやすく照れてるんだよなぁ。 もう一度イドにお礼を言う。とうとう耐えれなくなったのか、 イドは私から背中を向けてしま つ

……うん、昨日は嫌われたかなって思ったけど、イドが顔を逸らすの、 大体照れてる時だ。

リナ様。イド」

おはよう、 クマ」

元気に私達に挨拶をしてくるクマ。 リビングで布団も無い状態で眠っていたから、 私は一度伸びをし、 少し体が痛い。 硬くなった身体をゆっくりとほぐす。 でも……

昨日までは身体が重たかったけど、 今はすごく軽いよ。これもイド のおかげだね」

44

お前のためにやっただけなんだからな! 気にすんなって言ってるだろ!」

出た。もうツンデレの形すら保ってない。カッコいいのに可愛い。 そこがイドのいいところ。

モンスターを狩って、 どうやってお金を稼ぐの?」

クマは私の視線まで浮いて話す。

「モンスターを倒すと、 【モンスターの心臓】 という物が手に入るんだ.

「うえっ!? 心臓……?」

なんだか物騒だな。 でも狩りだって言っているんだし、 心臓なんて単語が出てくるのは当然

て、 その心臓を取って来たらい いの?」

「うん。そうだよ」

「なるほど……」

私はチラッとイドの方を見る。 狩り Ú イド がやってくれるとは言っていたけど……少しぐらいは

私もやった方がいいよね。

私も狩りをやるよ」

別にお前はやらなくてもい いんだよ

「でもさ、 何かしないと、今までとなんにも変わらないから」

ずっと引きこもりだった一昨日までと何も変わらない。 家の中でネットしてゲームして、ただそ

わらないと私はいつまで経っても変われない。 れだけの意味のない毎日。もうあんな日々は嫌だ。 イドも優しいしクマだって親切だし。 ここで変

イドに血を分けてもらって身体が変わったように、 自分の 人生も変化させるんだ。

自分の人生を変えたいんだ。だから私にも狩りのやり方を教えて」

「……分かった。 危なかったら俺が守ってやる。 だからお前は安心してモンスターと戦ってみろ」

「イド……ありがとう」

私はイドとクマに笑顔を向ける。 きっと大丈夫だ。私は……きっと変われる。 この環境は、

変わるために神様が用意してくれた物なんだ。そう考えて、 前向きに生きていこう。

「ところで、武器なんかは必要ないのかな?」

武器? モンスターなんて素手で十分に決まってんだろ

「そうなんだ……そうなの?」

私はイドの言葉に疑問を感じ、 クマの方に視線を向けてみた。 するとクマは曖昧なことを言

出す。

「いけるような気もするし、 いけないような気もするね

「危ないかもしれないってこと!! 私大丈夫かな?」

再びイドの方を見ると、 そりゃ、 完全に安全なわけはないと思っていたけど、 イドはため息をついてハッキリと言い切った。 微妙な言い回しをされると怖くなってくる。

「う、うん……」 「グダグダ心配してんじゃねえよ。 お前のことは俺が命に代えても守ってやる。 だから安心しろ」

した。この先は瘴気の広がる空間だ。深呼吸し、 イドがそう言うのなら大丈夫なはずだ。私はイドに笑みを向け、 玄関の扉を開く。 家の外に出るべく玄関まで移動

「……あれ?」

外の空気が綺麗だ。黒い霧がこの家を中心に晴れている。

「……どうなってるの?」

える。 少し離れた場所はまだ霧がかかって汚いのに……家の周囲はキラキラと輝いているようにすら見

え? なんでこんなことになってるの?

「これは『空気清浄』のレベルが上昇したからだろうね.

「『空気清浄』……家の外まで綺麗にしてるってこと?」

「うん。そういうこと」

パタパタ浮きながらクマはそう説明してくれた。

たいと思うのが普通だよね? 綺麗にできるのかな? そっか……【マイホーム】はそんなに凄いんだ。このままレベルが上がっていったら、周囲 やっぱり汚いよりも綺麗な方がいいよね? ゴミ屋敷より清潔な家に住み

うん。ここを綺麗にしよう。まだここで暮らしていくかどうかは定かではないけれど、

る場所はとりあえず綺麗にしたい。私は目を輝かせて周囲を見渡す。

「待っててよー。綺麗にするからね!」

「誰に言ってんだよ」

「んん〜分かんない!」

イドは少し呆れている様子だが、クスリと笑ってくれた。

「じゃあ行くか。 この辺のモンスターはお前じゃ手に負えないだろうからな。 もう少し程度の低

所に連れて行ってやるよ」

「あ、ありがとう……でも、どうやって?」

イドの身体が黒く輝く。 ああ? そんなの決まってんだろ

その闇のような黒が大きく広がりを見せたかと思うと イドの身体はドラゴンの姿に変化して

いた。

「こうやってだよ!」

「わわわ!」

イドが私をひょいっと持ち上げ背中に乗せる。 そして大きく羽ばたき、 上昇していく。

「いってらっしゃーい」

「いいい、行ってきまーす!」

一瞬でポツンと豆粒みたいになってしまう我が家とクマ

イドは凄い速度で上昇し、そして飛翔する。

「……あれ?」

だけど不思議なことに、 イドの背中から振り落とされることはなかった。

風は肌に感じるのに飛ばされるような感覚はない。

「俺の魔力でお前の身体が飛ばないようにしてる。安心して俺の背中にいろ」

「うん……」

飛ばされないと分かると、 今度はその圧倒的なスピードが楽しくなってきて、 私は童心に戻って

大はしゃぎする。

「うわー! 凄い凄い! 凄い速いよ、イド!」

まるでジェットコースターにでも乗っている気分だ。 イドも気を利かせてか、 宙を回転したり急

下降したりして楽しませてくれていた。

雲の間を飛び、全身に風を受けて大笑いする。 空に輝く太陽も気持ちよく、 最高の飛行体験だ。

「そろそろ到着だ」

あ、もう到着なんだ……」

もっと飛んでいたかったけどな……なんて少しガッカリするが、 そんなことにイドを付き合わせ

るのもなんだか気が引けて私は何も言えなかった。

イドがバサバサ翼を動かし、ゆっくりと下降していく。

「あれ? あの町って……」

どうやらメロディアの近くだったようだ。出て行ったのに結局戻って来ちゃった。

地面に着地し、私は背中を下ろされる。

「あれならお前でも相手できんだろ」

イドは私を下ろすと人間の姿に変化し、

何かを見てそれを指差した。

「あれって……」

イドが指差したのは -イドと出逢う前に見たモンスターだった。

緑色の肌に子供のような身体。手には何も持っていないけど……あんなの私に倒せるの

私が分かりやすく不安そうな顔をしていたんだろう、 イドは嘆息して言う。

「あれはゴブリン。 この世界で一番弱いモンスターだ。 あれが倒せないようじゃ、 この先戦 V は無

「そ、そうなんだ……あれで一番弱いんだ……」

理だぜ」

ゴブリンっぽいとは思ってい たけど、 名前はそのままゴブリンか

「ああ……おい、ちょっと待ってろ」

「え?うん」

イドは人間の姿のままジャンプを……あ、 違う、ドラゴンの時 の翼だけ出して空を飛んでる。

「でもジャンプ自体は人間の姿の脚力だよねぇ……凄いジャンプ力だなぁ……」

人った小ぶりの剣を持っている。 それからおよそ三分ほど待っただろうか。イドはまた颯爽と空を飛んで帰ってきた。 その剣をそのまま差し出してきた。 手には鞘に

立ち読みサンプルはここま

一これ使え」

「つ、使えって……どうやって手に入れたの、これ?」

問題はそこだ。

かきながら、説明してくれた。 もし人様から盗んだ物だったらさすがに使えない そんな風に考えていると、 イドは頬を指で

「この町にはガラクタが捨てられてる場所があるんだよ。 そこから回収してきただけだ。 前に空か

ら見たことあるから知ってた」

「そうなんだ……ありがとう」

私は 女である私が使うからイドはこれを選んで持って来てくれたわけだ。 イドから剣を受け取る。これはどうやらショー トソードという、 普通の剣より そんなことは説明もし うも短い 物のよ

ないけど、彼の心遣いがなんだか嬉しい。

「じゃあ行ってくるよ、イド」

「ああ。危なかったら助けてやるから安心して戦え」

剣を鞘から抜くと、少し刃こぼれをしているようだった。 捨てられたガラクタだ、 ってイドも

言ってたもんね。これで倒せるのかな?

私はドキドキしながらゴブリンに接近していく。

するとゴブリンは私の姿に気づいたのか、こちらに向かって走ってきた。

「わーわー! 来たよ、どうしよう、イド!!」

「ちっ!」

戸惑う私を助けるためにイドが走り出す。

パーンと簡単に斬れてしまう。 私はパニックになりながら剣をブンブン振り回していた。 すると剣はゴブリンの首にか か り、 ス

ゴロゴロ転がるゴブリンの頭。

私は唖然としてイドの方を見る。 イドも驚いた顔を私に向けてい た。 あれ? なんでこんな簡単

に倒せたんだろ?

「……このゴブリンってそんなに弱かったの?」

「まぁ弱いっちゃ弱いけどよ……でも今のはちょっと異常だったな。 俺の血を飲んだとしても異

常だ」

イドは少し驚いた表情のまま私を見ている。

これは誰もが欲しがるに違いない。それで商売なんてする気はやっぱり毛頭無いけど。 というか、イドの血を飲んだら戦闘能力も上がるんだ。 やっぱり今のはおかしかったんだな。 だってスッパリ切れたもん 美容にもいいしドーピング効果もあるし、 ね。 普通こんなのあ り得 ない

「うーん……なんでこんな簡単に勝てちゃったんだろ」

「細かいことはよく分かんねえけど、お前が勝てるならそれでい

W

「そう、だね……うん。勝てるならいいね。あれ?」

死体となったゴブリンを見ていると、 なんとその身体が砂のように消えていく。 そして死体の後